



そのニュースを聞いたとき、目前が真っ暗になった。

次に覚えたのは激しい憤りと、妬みと、焦り。そしてそんなものしか湧いてこない私自身への嫌悪が、それらにひっそりと埋もれていた。

私はそれに気付きつつ、そっと、見て見ぬ振りを決め込んだ。



夏の始まり。

日差しも強くなり、訪れた夏の気配をひしひしと伝えてきます。水の都ネオ・ヴェネツィアは、観光シーズンに向けて順調にその賑わいを増しつつありました。

そんな中、私の日常は先日以来一変しました。ついに憧れのプリマ昇格——それも、シングルを飛び級という異例の決定です。取材にお仕事にと目まぐるしい日々が押し寄せ、毎日が緊張の連続でした。

それでも、最近になってようやく取材の波が区切りを見せ、一歩も二歩も進めた充実感と、そして訪れた一抹の寂しさを実感するようになりました。

加えて、今日は朝から雨です。柔らかな雨がしとしとと降り続き、街は水煙に沈んでいます。季節が戻ったように気温も下がり、客足もまばらです。雨音が周囲を包み、街の音も届きません。

静かな、静かな昼下がりひとき。

私たちが顔を見合わせたまま時間を止めたのは、そんな折に戻った寮の廊下の曲がり角でのことでした。

出合い頭にぶつかりそうになったその人は、ウェーブのかかった柔らかな赤毛の女性。鼻にメガネをちょこんと乗せた彼女の名前は

確か——そう、アトラ先輩。灯里先輩がトラゲットと一緒にになったという、我が『オレンジぶらねっと』の先輩ウンディーネです。

ただし、同じ会社ではあるのですが、私は彼女と直接の面識はありません。『オレンジぶらねっと』はでっかい大きな会社なので、すべての社員間に繋がりはしないのです。なのですが——

「……こんにちは、アリスちゃん」

アトラ先輩はそうでもなかったようです。自分で言うのもなんですが、私はでっかい有名人らしいです。

「……お疲れ様です、アトラ先輩」

そう返したとき、先輩の顔から感情が消えたことに気が付きました。瞬間全ての感情が姿を消し、取り残された微笑みがそのまま貼り付いてしまったような、そんな硬直でした。

そして先輩の視線は、縫い付けられたように一点へ向けられています。手袋がなくなつてまだ日の浅い私の両手が、居心地の悪さにまたむず痒くなるのです。



実際に目にするのと、それは想像以上の破壊力を持つていた。

目の前にいるのは、ミドルスクールを卒業したばかりのまだあどけなさの残る少女。私と同じウンディーネの制服を纏った彼女は、しかしその手に手袋をしていなかった。

ウンディーネにとつての手袋とは、未熟者の証。

素手での就業を許されるのは、一人前の証。

そして、自身の右手はまだに手袋に包まれたまま。知らず握った拳の中で、厚い生地が静かに鳴った。

「……話題のプリマも、さすがに今日は空いたのかしら？」

こめかみの奥がじんじんと鈍い痛みを訴えだす。考えがてんでまとまらない中、私の口は勝手に言葉を話し始めた。

「はい……予約のお客様も先ほどお送りしまして、他にはまだ入っ